

中ハ此文ヲ知ルベキ也」(十五)

と、事相互具に約して、絶對他力、即ち此國土は釋迦菩薩の慈悲で充されたものであるから、佛の方からは三界皆是我有であると説き、その次に

「我有ト申ス有ハ其レ眞言宗ニ非レバ知り難シ、但シ天台ハ眞性軌ト釋シ給ヘリ」

と、法華顯教の上に尙、眞言密教の在る事を示されてゐる。「但シ天台ハ眞性軌ト釋シ給ヘリ」とは密教の立場から天台の支義の釋を見られたものである。而して最後に、

「法華經ヲ是ノ体ニ意得ルハ則チ眞言ノ初門也」^五 但標章ニ載

本化の行法と戒壇論

中 澤 要 實

スル事ハ人ヲシテ、顯教ヨリ密教ノ勝ル、事ヲ知ラシメンガ爲ナリ」

と、明に顯劣密勝の義を斷定されてゐる。

法華經に對しての造詣、かくばかり深かつたにも拘らず顯劣密勝を確信されてゐた点よりすれば、聖祖當年の見地は台密に在つたと云はねばならない。

因にこゝに残されたものは眞言と法華の批較研究であり、眞言の祈禱に對する疑問であつた、而してこの問題の解決の爲に次に叡山遊學となるのである。

當家の觀心門の要素は三秘であることは今更云ふまでもないが此の三秘は一秘の妙法蓮華經に統一せられ萬象の種々相が法爾たる姿を以て所謂諸法實相の理即ち宇宙に於ける根本的實在の眞理を表示してゐる。とは云ふものゝやはり教相門に對する實踐門の存在である當家觀心門は一秘の姿を三秘の態に分類し

て本尊題目戒壇と立つる所に吾等人生に必須なる法華經の最高眞理の活動性を見出し得るものであると思ふ。此處に本化の行法が理即事、所謂事理不二の法門として他宗に對して優越感を覺ゆる所であると思ふ。

されば法華經最高眞理の活動的行法とは何ぞやと云ふに、云

ふまでもなくそれは三秘の妙行で即ち法佛一体の妙法蓮華經を本尊とし、且題目を唱へる其處に成佛があると云ふ受持一行による成佛にしてそれが戒壇である。これ戒壇に二種ある内の理壇である。この理壇はかく受持唱題により境智冥合の證の顯れた所を云ふのであるが、これは一念信唱發起の當初、佛功德聚をうけつぎて成立するものである。即ち四信五品鈔には一念信解(二五四)と云つてゐる。又御義に、

寶聚トハ三世諸佛ノ萬行萬善ノ諸波羅密ノ寶ヲアツメタル南無妙法蓮華經ナリ、行モ功モナク一言ニ受取ル信心ナリ

(二二九)

と行功なく一言信唱の所、成佛の果を得ると云ふのである。

故に總勘文鈔に、

名字即ノ位ヨリ即身成佛ス(一九〇三)

聞思修の三慧の上より云ふならば最も初めの聞慧を以て信唱するのみである。だから信が徹底したものでありさへすれば行功を用ひずして成佛すると云ふのが當家の成佛論だ。故に信行證の前後の差異を持たない所の同時的因果である。實に當家の行法はかくの如く易行である。されど果して易行として民衆に喰入つてゐるであらうか。

惟ふに法華經は諸經中王最爲第一釋尊出世の本懐經であつて難信難解の法門である事は言を俟たない。然してこの經の弘通傳道者を尋ねれば天台あり傳教があつたのである。然るにこれ等の先師先聖の法華經の弘通は法華經思想の難解そのまゝを取

扱ひ、余りに觀念的な上根本位の難行であつた。然るを宗祖によりて最高眞理である法華經が最も低く活動的の姿とせられたのである。これ即ち宗祖の報恩鈔の所謂「時の然らしむるのみ」(二五〇九)であつたのであらう。時究も末法應時下根の輩なれば難行の易行化即ち最高根本眞理の大衆化であつたのである。これ受持一行による題目宣傳であつた。この任務は本化上行結要付屬により果されたのである。壽量品に是好良藥今留在此汝可取服勿憂不差と、又高橋入道書に、

病ハ重シ藥ハ淺シ、其時上行菩薩出現シテ妙法蓮華經ノ五字ヲ一闍浮提ノ一切衆生ニ授クベシ(二二七九)

又四條金吾殿御返事には「經ニ云ク護持佛所屬」(二〇九五)とあるを見ても明かである。即ち天台等はこれ等を知つてはゐたが三故を以て法行を立てゐたのである。然るに宗祖は對するに以信代悲の受持一行を以て當家の信行論を骨張し受持成佛を説かれたのである。四信五品鈔に、

佛正シク制ニ止シテ戒定ノ二法ヲ一向ニ限ル慧ノ一分ニ慧又不レバ堪

エ以テ信ヲ代レテ慧ニ信ノ一字爲レズ詮ト(二五三九)

又四條金吾殿御返事に、

受クルハ易ク持ツハ難シサル間成佛ハ持ツニアリ(二〇九四)

故に當家の本門の戒壇と云ふのは受持唱行を續くる所これ常寂光土と化する。故に如何なる山林田野でも唱行の聲する所寂光の寶刹であり、而して行人即成する所戒壇である。經は神力品の

結要文旨以下に明かな所である。御義には「與如來共宿ノモノナリ」(御義)〇)どあり其他遺文中(九九一)(八四一)(九二〇)諸所に示されてゐる。これ依正の現世成佛である。更に現世に限らず未來成佛即ち靈山淨土往詣にまで及ばなければ佛教の三世成佛の徹底味がない。其の文證又遺文中諸所にあり、波木井殿御書には、

此法華經ハ三途ノ河ニテハ船トナリ、死出ノ山ニテハ大白牛車トナリ、冥途ニテハ燈トナリ靈山へ參ル橋ナリ。靈山へマ

シマシテ良ノ邸ニテ尋ネサセ給へ必待チ奉ルベク候。(二二四)とあり其他(八三六)(二〇六五)(二〇九三)(二〇六一)(二〇四八)(二〇〇一)(一九九二)(一九二四)(一五三)參見し

てゐるがこの未來成佛は娑婆即寂光即身成佛の具体化であり、又單なる地球上たる娑婆世界に限らず無限の宇宙法界の成佛を説かれたものと見るべきである。故に如何に當家の戒壇論は廣大無邊なるかに驚かされるのである。これが本門の戒壇に於ける理壇である。この戒壇建立は一に受持一行にある事は先にも述べた通りであるが此處に注意すべき事は受持唱行の方法である。即ち徒らに口先ばかりの唱題では駄目である。身口意の三業に受持する所に眞の行法の姿がある。蛙鳴蟬噪に等しき唱題の行法であつては戒壇建立とはならない。即ち土籠書に、
法華經ヲ餘人ノヨミ候ハ口バカリコトババカリハヨメドモ心ハヨマズ、心ハヨメドモ身ニ讀マズ、色心二法共ニアソバサ
レタルコソ貴ク候へ。(六九五)

本化の行法と戒壇論

色心二法の讀誦この点より吾人が現代人に唱題行が易行として喰入つてゐるであらうかと疑念を持つた所以である。

色心二法三業受持の唱題云ふ事は易であるが相當の難事であると思ふ。基督教的に云ふならば禁斷の智慧の果を食つた罪人である衆生には、絶對歸依絶對信を起さしめると云ふ事はなかなかの難事、容易の事ではないのである。されど宗祖のこの唱行宣弘は末法大判の上に立つて末法下機下根の見解としては無理からぬ所である。此處に於て思ひ至る事は彼の

上根上機ハ觀念觀法モシカルベシ、下根下機は唯信心肝要也の持法華問答抄の文旨は味ふべき思召と見る。

而してかゝる方法を以て一天四海皆歸妙法依正妙法の聲と化する時間浮統一の理壇建立の實現を見たのである。

即ち其時に要求せらるゝのが事壇の建立である。即ち三秘鈔に戒壇トハ王法佛法ニ冥シ、佛法王法ニ合シテ王臣一同ニ本門ノ三大秘密ノ法ヲ持チテ、有徳王覺徳比丘ノ其乃往ヲ末法濁惡ノ未來ニ移サン時、勅宣並ビニ御教書ヲ申シ下シテ靈山淨土ニ似タラン最勝ノ地ヲ尋ネテ戒壇ヲ建立スベキ者歟、時ヲ待ツベキ耳、事ノ戒法ト申スハ是也。(二〇五三)

この戒壇建立せらるゝ時は既に理壇の建立が徹底的に實現し終れる時でなくてはならないと思ふ。即ち王佛冥合の時とは法華の顯教が世界統一の大教であり、王法は日本天皇が世界統一の覇者となつた時に建立を要求せらるゝ所の戒壇である。昨今事壇建立の地について最勝の地と仰せあるは身延だ富士だのと異論

を立てゝゐるが敢てやかましく論ずる必要はないと思ふ。と云ふのは、吾等日蓮門下の任務は今は受持唱題行を以て宇宙の全人類をして、この法華首題の下に開示悟入せしめての後であり、日本天皇が世界統一の王者となつてからの問題であるからである。これ等は永遠の理想であれば或は實現不可能であるかも知れないが絶対に不可能ではなく可能性が充分にある事も認められないでもない。即ち永遠の理想としては可能の問題である。かゝる永遠性を有する点、其處に日蓮門下の永遠不滅の努力が續けられ且又永恒不變の大法たる所以が存するものと思ふ。故に日蓮上人が時を待つべきのみと仰せられて事壇建立については余り詳述せられざりし所以と思ふ。

されど門下の理想實現の大綱組織の構成上、敢て論議を求むるならば身延の聖境を持つて事壇建立の土地と信ずる。彼の富士派の祖たる日興上人書札に、

一 閻浮提ノ内ニ日本國、日本國之内ニ甲斐ノ國、甲斐ノ國ノ中ニ波木井ノ郷ハ久遠實成ノ釋迦如來ノ金剛寶座也(身延山御書類聚五二)

後年興師と波木井氏との感情の齟齬があつたからと云つて身延の宗祖永遠止魂の地を以て富士なりと見るとしたならば悲しくもあり、又興師の本懐でもないかと推察する、尙宗祖が身延の山を指して、

釋尊ノ住給ヒケン鷲峰山ヲ我朝此砌ニ移シ置キヌ(一三七七)
靈山淨土ニモ相似タリ天台山ニモ異ナラズ(一八五九)

彼ノ月氏ノ靈鷲山ハ本朝此ノ身延ノ嶺ナリ(二〇七〇)
天竺ノ靈山ニモ勝レ日域ノ比叡山ニモ勝レタリ(二二一三)
何クニ死ニ候トモ墓ヲバ身延ノ澤ニセサセ候ベク候(二二〇四)

二二四

とこれ等の御文を拜して、つくづくと思ふのは身延が閻浮第一の靈地であると云ふ事である。然るに何ぞやかゝる宗祖の言を信ぜずして種々言を弄して異論を立つるは謗法の重きものであらう。近時日本精神發揚の点より日本の代表的な山富士を持つて戒壇建立すべきであるとして宗祖在世の砌の事として傳説せられてゐる所の經ヶ嶽の問題を種々論議せられてゐるやうであるが吾人は富士戒壇建立説に對してかく考へてゐる、富士は成程三國中最も秀麗の山、世界各國にも比喩なき所の存在ではあるが富士は見る山であつて住むべき山ではない。現今では休火山であるが何時目を醒まさないとも限らない實に住むには不安定の處と見るからである。かゝる事壇建立地撰定問題を論議決定しておくも必要でない事もそれがそれよりも、もつと近く非常時日本國內に於ける王佛冥合の具体的方案でも事壇建立の前提として考へるが宜い。單なる一俗輩の文部省の一部に存する宗教局の支配下にあつて、少しでも佛教が政治的道具に使用せらるゝを心宜しと拱手して待つべきであらうか。

この点からしつかり考へて行くべきであらう。王佛冥合へ進むべき宗教の地位は國家として少くとも一宗の管長としての人間は如何なる地位におかれてこそ王佛冥合もかなひ、三界の大導

師として自任し得るかを考へらるべきであらうと思ふ。

更にそれに進むべき最も近くは唱題三業受持の國家社會への具体化である。本化行法の社會への具体化それこそ本門戒壇建

立必然の前提であり宗祖の法華經的眞生命は此の一点にあつたと信じて疑はない。

日蓮聖人御系譜の研究

鈴木智好

◎ 研究の動機

宗祖御書中には俗姓に關しては殆んど仰せられてゐない。「海人の子」とか「賤民の子」とか仰せられてゐるのみである。宗祖自らは左程家系に對して關心を持つて居られなかつた様である。然し日蓮聖人の流を洩む吾人が其の祖先は何か、又如何なる人の子孫であつたかを明にする事は、大上人の御事蹟を研究し其の教學を研究すると同様に重大なる意義を有するものと思ふ。大聖人が如何に本化の上首上行菩薩の御再誕にせよ、御兩親なくしては此の世に御出世遊ばされなかつた。而して御兩親も又其の御先祖なくしては有り得ないのである。大聖人の御先祖が直接其の教學に關係しないにしろ、大聖人の家系を研究する事は、吾人の與へられたる當然なすべき任務である。然るに

宗祖滅後六百五十有餘年を歴たる今日此の重大事が等閑に付され今日迄何等具體的研究の行はれなかつた事實は余りにも宗祖の本地てふ思想にとらはれたる結果ではなからうか。

滅後二百年前後「長祿寛正記」「化導記」「註畫譜」等によりてや、俗姓に關する研究の有つた事は有つたが、古來の宗門人は、是等を以て大法弘通の政策的意圖に出でたるものとして、其の俗姓を高め、貴顯紳門に縁を求めて、九重の雲上に大法を達せんとするよすがなりと言ひて、かゝる文献を等閑に付し、又何等權威なきものと下したのである。

以下順を追ふて是等信すべき文献を出して大聖人の御先祖は果して何氏なるやを確めんとするものである。

日蓮聖人の御傳記を拜讀し、又其の御先祖を尋ぬる人の誰しも一様に心付く如く、其の御先祖に關しては全く書かれてゐな